

第3回「水産業の明日を拓くスマート水産業研究会」

議事要旨

〔 日時：令和元年12月16日（月）13:30～17:00 〕
〔 場所：Learning Square 新橋 ルーム No4 D・E 〕

- 研究会の開会に当たり冒頭、宮下 和士 会長より挨拶を行った。
- 第4回研究会までに各ワーキングチームで協議すべきテーマが承認された（資料1）。
- 各ワーキングチームにおける中間取りまとめについて報告を行った。
 - ① 漁業・養殖業ワーキングチームからの報告（報告者：八木 信行チーム長）
（報告内容については資料2及び参考資料1）
 - ② 流通・加工ワーキングチームからの報告（報告者：濱田 武士チーム長）
（報告内容については資料3）
 - ③ 連携基盤ワーキングチームからの報告（報告者：和田 雅昭チーム長）
（報告内容については資料4及び参考資料2）
- 宮下会長より、研究会の最終取りまとめに向けた方向性について、各ワーキングチームにおける最終取りまとめを踏まえて研究会取りまとめ案の作成・協議することについての説明を行った。
- 水産庁より、「水産新技術の現場実装推進プログラム」について、内容の説明を行った（資料5）。
- 議題全般に関する討論が行われ、主な発言は以下のとおり。
 - 【漁業・養殖業ワーキングチームからの報告について】
 - ・ 漁業者や生産現場からの情報収集には大きな手間がかかる。改正漁業法等で今後さらに様々な浜からの情報提供が必要となる中で、個別に情報を出すのではなく、1度出せば済むような仕組みを考えてほしい。
 - ・ 漁業者から情報をもろう話（資源評価・管理等）と所得向上に繋がる話は別であり、両方に資する仕組みとしなければ技術があっても自動的に導入されない。その辺りの整理が必要。
 - ・ スマート化により魚価の向上や、漁獲増が図られなかったとしても燃油代等の経営にか

かるコストが下がったといったことで取り組む効果がある。スマート水産業に取り組むことで漁業者が抱える課題を解決するといった視点が重要。

- ・ 現場のニーズを適確に把握し、事例についてのキーパーソン等を掘り起こしていくことも重要。
- ・ スマート水産業の取組を社会実装していくためには、まず分かり易い成功事例が重要であり、これを横展開していく手法がよい。成功事例を生み出し、社会実装するための行動計画をしっかりと詰めてほしい。

【流通・加工ワーキングチームからの報告について】

- ・ 漁業者から陸上への情報提供を可能としても、加工流通業者のメリットにはなるものの漁業者のメリットには繋がりにくいため、漁業者へのメリットになる仕組みも考えなければならない。例えば、複数の水揚げ候補地がある場合は、相場について電話で情報収集をし、相場の高いところに水揚げするため、これらを情報システム化すればメリットとして期待できる。
- ・ 生産者から消費者までの水産物流通の大半は、産地市場と消費地市場が介在するが、そのことによって情報流が途切れている。ブロックチェーンを使った情報技術を導入すれば、トレーサビリティに活用できるだけでなく、川上サイドが川下の情報も得ることができるようになり、マーケティング活動やクレーム処理の効率化に応用できる。
- ・ 水産加工業では、労働軽減・所得向上・コスト低減の3つのメリットが生じる自動化を進める必要があるが、それを支援する仕組みを考える必要。
- ・ トラック業界の人手不足により、物流コストが高騰している。産地から消費地、消費地市場から小売業界などへの物流網を効率化する手段として、配送先が同じである場合、同業他社の商品も共同で配送するシステムが有効である。

【連携基盤ワーキングチームからの報告について】

- ・ 公的な支援がなくなっても自立して取組が継続されるようなものが成功事例であり、このような取組を目指していく必要がある。
- ・ 少なくとも来年度における取組は、様々な課題を抽出できる取組を行うのではなく、現場において理解が得られやすいもの、ニーズが高いものなどで行うことが現実的。
- ・ 漁業・養殖業や加工・流通と繋がるような取組があるとよい。
- ・ 2020年の連携基盤の構築・稼働に向け、最初の取組として連携基盤ワーキングチームにおける5つの具体的提案をベースに、今後の社会実装を見据えて内容的・技術的に最良と考えられる取組を選定すべき。

【研究会の最終取りまとめに向けた方向性について】

- ・ 連携基盤については、ビジネスだけでなく、資源評価や管理への活用も目的であり、公

的機関の参画が重要。この点は農業分野と大きく異なる点であり、このような水産の特性を十分に踏まえた仕組みにしていくことを盛り込む必要。

- ・ 研究会の最終取りまとめの基礎となる各ワーキングチームの取りまとめに向けて、スマート水産業を取り組まないことによるデメリットも示すべき。

【その他の意見について】

- ・ 技術開発の推進や普及を国として進めていくことが重要であり、実装に向けて誰が何をやるのかを具体的に検討する必要がある。また、研究者等も減っており、水産博覧会のような大きな仕掛けも考えてほしい。
- ・ このような場が、水産業の将来を担う若者が参加できる場であって欲しい。

- 第4回研究会の開催日時は令和2年3月4日午後を予定。

—以 上—